

イタリア留学レポート

-ボローニャ大学 (DAMS) -

Report of study in Italy

-DAMS in University of Bologna-

東京芸術大学大学院 音楽研究科 音楽文芸 博士課程在学 萩原 里香

HAGIHARA Rika (Tokyo University of the Arts)

キーワード：音楽研究、イタリア政府奨学金、海外留学

はじめに

私は2011年10月より2013年9月までの2年間、イタリアはボローニャ大学の音楽学コースに留学しました。東京芸術大学の博士課程に籍を置きつつ、休学という形で、博士論文のための研鑽に励みました。留学が実現できたのも、イタリア政府より給費奨学金をいただけたおかげであり、感謝しております。今回は留学のきっかけから、奨学金獲得、日本での準備、現地で心掛けたことなどをご報告いたします。

留学まで

私は、日本大学芸術学部、東京芸術大学修士課程を経て、現在は同博士課程にて17世紀初期のイタリア・オペラについて、とりわけ、コラーゴという舞台上演責任者を担っていた役職に興味をもって、音楽と文学と演劇の観点から研究することを目指しています。学部を卒業してから数年間、社会人生活を送っておりましたので、修士課程に入学してからも、働きながら勉学を行うというスタイルをとり、現在も続けています。そのような生活スタイルでしたので、正直言いますと、最初から博士課程への進学、及び留学を現実的に考えていたわけではありませんでした。というのも、働きながらどこまで出来るのか見えなかったからです。修士論文を終えてから、やはりもっとやりたい、ちゃんと突き詰めたいという思いが強くなり、悩みましたが、博士課程に進学することを決意し、同時に、長期でのイタリア留学を考え始めました。私の研究分野では、日本にある資料ではやはり不十分です。もちろん、博士論文のための資料収集だけを、イタリアで短期間集中して行うことも一つのやり方ですが、もしチャンスをつかめたのなら、現地で勉強したいと強く思うようになりました。

語学力のために

留学を目指すにあたって、クリアにすべき課題は多々ありましたが、ともかく会話力をつけなければと思いました。恥を承知でお話しすると、イタリア語学科を出たわ

けでもない私は、23歳でイタリア語を本格的に始め、受験対策として読解することを中心に学習していましたので、修士課程を終えて博士課程に進学した時点の会話力はゼロでした。そこで、イタリアの私立の語学学校で、1カ月間という短い期間での研修を、3年間で3度行いました。そのとき選んだ街ですが、1度目は修士論文で取り扱ったテーマの重要地であったローマ、2度目と3度目はボローニャでした。これは、留学するならボローニャ大学と決めていたので、どのような環境の街なのか知っておきたかったからです。ボローニャは、街の至る所に大学の校舎があり、中心部には街の財産である大きな図書館があります。中世から学問の町として栄えてきた風土のなか、多くの学生が勉学に励み、切磋琢磨する様子を見て、申し分のない環境だと感じ、留学したいという思いがますます強くなりました。

さて、何故ボローニャ大学かと言いますと、私の研究テーマである、オペラの分野の世界的権威である教授がいらしたからです。その教授の著書がきっかけとなって、現在の論文テーマにも出会えましたので、どうしても師事したかったのです。また、資料収集を行う際にも、北イタリアの中心に位置するボローニャは、各地の図書館や古文書館などを訪問しやすい拠点になるとも思いました。

奨学金獲得に向けて

こうして語学力の対策をしつつ、奨学金の獲得を目指しました。前述したとおり、ストレートで進学したわけではありませんでしたので、年齢制限という壁に阻まれることもありましたが、政府や民間財団などの支援団体は少なくない数が存在しますが、自分の研究テーマと留学スタイルに合った団体でないと、採用はされないと思いましたので、条件に合致するものを探しました。出発する年度を調整し、応募の前年末にボローニャ大学の教授に、勇気をだしてメールを送りました。私の研究テーマと教授のもとで学びたいという旨を伝え、奨学金応募にあたっての「受入承諾書」をお願いできませんか、という内容でした。紹介者も介さない見ず知らずの日本人からのメールに返信していただけたのか、不安でいっぱいだったのですが、なんと30分で快諾の返信をいただけたのです。感激でした。

こうして4月に芸大を休学しました。この年に奨学金を獲得できたら留学しよう、獲得できなかつたら日本でがんばろうという覚悟でした。すでに30歳を過ぎていたので、年齢を考えた結果でもありましたし、また、自分のやっていることに留学するだけの価値があるという、何らかの指標が欲しかったのだと思います。そして、仕事と勉学というバランスで保っていた生活を中断するタイミングも必要でした。

そして5月の中旬、イタリア政府奨学金の試験に臨みました。試験はイタリア文化会館で行われ、1日目はイタリア大使館の方とのイタリア語による面接試験、2日目は日本人の教授との研究テーマに関する日本語での質疑応答でした。それぞれ20分程度だったと思います。そして幸運にも採用していただくことができ、翌週には合格者全員で在日イタリア大使を訪問し、ご挨拶させていただきました。

情報収集について

留学前の情報収集についてですが、私の専門とする「イタリア音楽」という分野は、

音楽を中心に演奏している方は非常に多いのですが、研究している方は意外なことに少ない分野です。実技をされる方たちは、大学ではなく「コンセルヴァトーリオ」という音楽学校で学びます。よって、できるならお話しを伺ってみたかったのは、比較的近年に音楽研究の分野で「大学」に留学した先輩学生でした。ですが、残念ながら出会うことは出来ず、留学についても、そして奨学金についても何も情報は得られませんでした。そのような状況でしたので、独自に入手できた情報はなく、何をすることも不安なままでした。

留学が決まってからは、同じ奨学金合格者たちと情報を交換し合いました。前年度の奨学生と知り合いの方もいたおかげで、非常に有益な情報をいただけました。(出発前もイタリア滞在中も) 私費留学生とは異なる手続きがいくつもありましたので、現地での保険、奨学金の受け取り、そして更新についてなど、不明確な点について情報を共有することができ、とても心強かったです。

また、渡航前に行ったポローニャ大学とのやりとりの段階でも疑問はたくさんありました。イタリア文化会館からは直接大学に確認するように言われましたので、前述の教授に問い合わせたところ、科の主任教授の連絡先を伺うことができ、よって主任教授と直接やりとりさせていただきました。

情報が得られないときは、それだけで不安になりましたが、結局は行ってからしか解決出来なかったことが多かったです。事前に聞いていたことと異なることも少なくありませんでしたし、ほんの1年前の情報が変更されていることも日常茶飯事で、あらゆることは一つの例だと捉えておく必要があると実感しました。とはいえ、情報がゼロでは不安が無駄に募るものですし、有意義な準備をするためにも、周囲に情報を持つ方がいることは重要だと思えます。

所属大学の支援

所属の東京芸術大学からの支援は、特にありませんでした。というよりも、東京芸術大学と留学先大学に、提携や交換などの何かしらの接点があったわけではないので、支援してもらえるかどうか考えることもなく、求めることもしませんでした。登録などの諸手続きは日本の所属大学ではなく、イタリア文化会館を介して、ポローニャ大学に直接行いましたので、おそらくポローニャ大学にとっても、その学生が自分の国に学籍があるかどうかは関係がないと思います。実際、提携や交換があれば別なのでしょうが、日本に所属がある学生とない学生に何も差はなかったと思います。

留学が決まった後で、ひとつだけ芸大に相談に行きました。念のための資金を考え、緊急で何かしらの貸与を申し込めないかという内容です。残念ながら、休学中の学生には申しこめるものはないというご返答でした。

渡航の直前には留学する旨を届け出に行ったのですが、年度頭に休学手続きが済んでいたため、渡航先や大学、滞在先など、とりわけ何も報告する必要はありませんでした。短期でも長期でも、ちょっとしたレッスンでも、海外で研鑽する学生がごまんという芸大なので、そういった特殊性故、海外に出ることは比較的日常的なことです。なので、復学した年度初めはまだイタリアにいたのですが、履修登録や研究計画書の提出について、帰国後でかまわないという柔軟な対応をしていただけました。

日本に所属大学があっても、交換等でない限り個人の活動なので、後ろ盾は何もない、守ってもらえるものは何もない、何が有っても自己責任なのだと思います、強くいられました。

出発まで

私が選んだのは、ラウレア・マジストラレという、日本では修士課程にあたる2年間のコースでした。というのも、東京芸術大学を休学できるのが2年間だからです。イタリアは、科目履修生（聴講生）では複数年の滞在が出来ないので、最低2年間は滞在したかった私の唯一の選択肢でした。よって、正規課程への登録となるため、本来なら9月頭にある、イタリアの全大学が外国人学生に義務づける語学試験を受けなければなりません。この年度、ポローニャ大学では、政府給費生は語学試験を免除されました（これは年度にもよる、翌年は政府給費生にも語学試験が課せられました）。したがって、私が受けなければならない入学試験は、コースによる面接（discipline della musica の場合、9～12月の希望日に受験可能）のみでした。そのようなわけで、私は授業がはじまる10月に入ってから渡伊しました。

準備期間でもっとも大変だったのは、現地での滞在先の確保です。VISAを取得するためには大家さんになる方の一筆とその方の身分証明書が必要になります。私は幸いにも、語学学校に行っていたときに知り合った方々のご協力で用意することができました。これはイタリア文化会館のサポート外のもので、また、そういったことをケアしてくれる公的機関は（私の知る限り）なく、苦勞している方が多かったように思います。一応、ポローニャ大学では、留学生に住宅情報を提供する姿勢もあり、相談にも応じてくれるようで、実際、大学から情報を得て、家探しをしている留学生にも会いました。しかし、結局それは、現地についてから探すことのできる、VISAの必要のないEU圏の留学生に向けてのもので、それに、今回の私のように、正規課程に入学予定の場合、渡伊時点ではまだ正式な学生ではなく、あくまで受験生ですので、正式な学生ではない身分で大学のサポートを期待するのはやはり無理な話なのです。入学試験等が事前にあつて、入学確定後に渡航するという流れではなかったため、仕方のないことだと思います。

イタリア政府奨学生でよかったこと

上述もしましたが、留学生が受けなければならない語学試験を免除されたことです。そのおかげで、通常なら非常にタイトなスケジュールで動かなければならないのですが、ゆっくり日本を出発することができましたし、なにより、期間の短い受験生用のVISAではなく、1年間という長期のVISAを大使館から発行していただけました。そのおかげで、現地で行う滞在手続きがひと工程省略できました。一回の手続きが非常に煩雑で時間がかかるものなので、本当にありがたいことでした。

渡航後、面接試験が済むまでは正式な学生ではなかったもので、数か月間は学生証がなく、学内システムが利用出来ないなどの不便がありました。ですが、学内外の施設の利用、セミナーや学会への参加において、「イタリア政府奨学生証」があったおかげで身分が証明でき、スムーズにいきました。

また、ボローニャ大学は規模が大きく、世界各国から政府奨学生がやって来ているため、大学が外務省との仲介をしっかりと行ってくれました。よって、大学に書類をひとつ提出するにも本来なら数時間待ちというのが当たり前なのですが、便宜を図ってくれたように思います。

現地で心掛けたこと

専門の勉強はもちろんなのですが、とにかく「イタリアを知る」ことを心掛けました。私の勉強している音楽は、古くから文化の一部ですし、教会音楽から始まった西洋音楽にはカトリックの文化が大きく影響しています。例えば、オペラのシーズンは謝肉祭の時期ですし、宗教行事のためには大作曲家たちがすぐれた音楽を生み出してきました。切り離しては考えられない宗教と音楽文化の関係があります。私自身は敬虔な仏教徒というわけではないですが、それが下地となった日本文化で生活してきたわけで、全く異なる文化がはぐくまれた土地での生活は未知なものと言っても大げさではないでしょう。今も世界中を魅了するイタリア音楽が生まれた豊かな文化の中で、現代のイタリア人がどのように過ごしているのか知るために、たとえ短い期間でも、そこで生活するチャンスをいただけた以上、できるだけイタリア人の中に入っていき、イタリアのように生活しようと思いました。

そして、多くの友人に恵まれたおかげで、内輪のホームパーティから、クリスマスや復活祭などの季節的・宗教的行事、年に数回あるバカンス、夏の音楽祭で見るオペラ、そして各地の食べ物を知ることなど、常にイタリア人たちと関わりながら、現地での生活を十分に体験することができました。また、イタリア人との触れ合いのみならず、世界各地からやってきている留学生との交流も大きな経験でした。彼らもある程度自国で研鑽を積んだのちにイタリアにやってきているので、比較的年齢も近かったですし、同じ様に国を離れて学ぶ彼らの覚悟や志は刺激的でした。日本人である私以上に苦勞を重ねている人も多く、非常に励みになりました。すべての出会いと出来事において、貴重な経験をさせていただいているな、と日々実感しました。

さいごに

イタリアは中世のころから何百年もの間変わらない街並みを残し、かつての雰囲気と空間がそのまま残っています。17世紀の音楽文化を学ぶ上で、このような環境の中で2年間生活でき、オペラという総合芸術が生まれた豊かな文化を肌で感じ、目的以上のものを得ることができました。専門分野のみならず、このような経験を少しでも多く社会に還元できるよう、これからも取り組んでいきたいです。

私自身、事前に有意義な情報を得ることが出来なかったもので、一個人の体験談ではありますが、参考にしてくださる方がいらっしゃれば幸いです。